奔流

題字揮毫・梅原猛

≪もくじ≫

■特集：3･11にどう向き合って生き抜くか
4頁・荒川中流域の再生と玉淀ダム撤去へ、一歩前
…… 石橋　浩治（編集委員）
7頁・あなたも会員になりませんか（会則抄録）
8頁・若狭の一仏教徒からのメッセージ
……中嶌　哲演（明通寺住職）
9頁・現在進行形の東電福島第一原発事故に苦悶
　　ー安全神話崩壊の冷酷な現実に耐えてー
……円谷　寛（鏡石町議会議員）

≪第５号≫

■発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町２-５-13
FAX･TEL　042-381-7770
■発行人・根津　東六（共同代表）
■編集人・矢間秀次郎（共同代表）
■〒振替・00120-0-710488

大河の一滴（5）

伝統と風土に根差した地域力が復興の基盤

―３・11が問いかける近代システムの終焉―

内山　節（哲学者）

東日本を襲った大災害は、誰でも気づいているように、地震・津波という自然の災禍と、原発事故という文明の災禍とが同時に発生した。自然の災禍だけなら、これまでも人間たちは繰り返し経験してきた。どれほど大変な事態が発生しても、人々は再び新しい歴史をつくりだしてきた。それが可能だったのは、地震も津波も、自然にとってはひとつの波動であり、けっして災害ではなかったからである。

伝統的な日本の社会観は、社会とは生きている人間だけによってできているものではなかった。社会は自然と人間の社会であり、生者と死者の社会であった。自然とのつながり、死者たちとのつながりのなかに、自分たちの営みがあることを人々は諒解していた。死者たち、すなわち先輩たちがつくりだした基盤の上に現在がつくりだされている。とすれば、地震、津波は自然にとっては災害ではなく、また、たとえすべてが破壊されていたとしても、先輩たちがつくりだした人間の生き方や労働、文化なども消えてしまったわけではない。このふたつの「残ったもの」を感じるとき、人々は復興の基盤はなくなっていないことを感じることができた。

私は今回の大災害でも、復興はこの道程にあると考えている。国家が復興の主体ではない。県も、合併で広域化した市も主体にはなれないだろう。地域のなかに何が残されているのかをつかみとれる人たちしか、地域を復興させることはできない。他の人々はそれを応援することができるだけである。

そして、だからこそ原発事故は許すことができない。それは自然にとっても災害であった。そこには受け継ぐことのできない、その意味で「死の世界」が広がっている。原発事故は地域の未来の時間を停止させ、破壊してしまったのである。被災しつづける自然だけがここには展開する。

それは私たちの時代がつくりだしたひとつの結果だった。私自身はつねに原発に批判的な態度をとってきたけれど、その私も原発とともに展開する社会のなかで、自分の営みをつづけてきたのである。いまでは多くの人たちが、この構造のなかでこれからの社会のあり方を模索している。

復興は日本の社会のつくりなおしと一体的にすすめられなければならない。それは、単なる原発から自然エネルギーへといったことではないだろう。近代以降の歴史が、原発事故という「結晶」をもたらしたのだということに、いま私たちはどれだけ真剣に対峙できるか、なのである。そのことをとおして、自然や死者とともにある社会を取り戻すことに、である。

（立教大学大学院教授）

＊主な著書に、『自然と人間の哲学』岩波書店、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書、『怯えの時代』新潮社、『共同体の基礎理論』農山漁村文化協会など多数。

＊既刊の本欄ご執筆の先生方は下記の通りです。創刊号・高橋裕（東京大学名誉教授）、2号・井出孫六（直木賞作家）、3号・加藤幸子（芥川賞作家）、4号・室田武（同志社大学教授）。